



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ほどほどの懸想』 注解
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 164, 1(右)-20(右)
Issue Date	2021-07-16
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.164.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82373
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_164_Goto.pdf



『ほどほどの懸想』 注解

後 藤 康 文

一 ― 小舎人童の恋 ―

【本文】（底本＝高松宮本）

祭のころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしきこいへ小家の半は部とみも、葵あふひなどかざして心地よげなり。

童あこめべの、相あこめ、袴あこめきよげにて、さまざまの物忌けさうどもつけ、化粧けさうして、「われも劣あふひらじ」といどみたるけしきどもにて行さきちがふは、をかしく見ゆるを、まして、そのきはことねり小舎人・隨身などは、ことに思ひとがむるもことわりなり。

とりどりに思ひわけつつ、ものいひたはぶるも、「何ばかりはかばかしきことあらじかし」と、あまた見ゆる中に、いづくのかあらむ、薄色着たる、髪は丈ばかりなる、頭かしらつき、容体やうだいなどいとかしげなるを、頭の中將にさぶらふ小舎人童、「思ふさまなり」とて、いみじうなりたる梅の枝に、葵をかざして、取らすとて、

梅が枝にふかくぞ頼むおしなべてかざすあふひのねもみてしがな
といへば、

標しめのなかの葵にかかる木綿ゆふがづらくれどねながきものと知らなむ
と、おしはなちていふもされたり。

「あな、聞きにくや」

とて、笏さくして走り打ちたれば、

「そよ、そのなげきの森の、もどかしければぞかし」

など、ほどほどにつけては、かたみに「いたし」など思ふべかめり。そののち、つねに行き逢ひつつも語らふ。

【注解】

○今めかしう——形容詞「今めかし」は、この物語の明るく清新な基調を象徴するキーワード。のちにもう一度用いられる。○心地よげなり——「あやしき小家の半蔭」を主語とする擬人法。賀茂祭を間近に控えた華やきが、京の隅々にまで満ち溢れる様子をうまく表現している。○まして——情景を俯瞰する語り、手の私にもまして、の意。○思ひとがむる——「とがむる」は底本ほか主要諸本「とかめる」。「とがめる」は平安文法では説明不能であるため、「め」を「む」に訂正した。おそらく下二段動詞が下一段化した、後代の言語状況を反映しての転化だろう。清水浜臣自筆本等末流本文「とかむる」。○いひたはぶる——底本「いひたはふる」で「る」に「ル」の傍記。下二段活用の複合動詞「いひたはぶる」は係助詞「も」に接続する関係上、ここでは連体形でなければならない。よって、他本により「る」一字を

補った。○はかばかしきことあらじかし——たいして成果もあるまいよ。「あらじ」は底本ほか諸本「ならし」だが、「な(奈)」は「あ(阿)」の誤写とみて改めた。参考「まことは、かやうの御歩きには、隨身からこそはかばかしきこともあるべけれ、後らさせたまではこそあらめ」(『源氏物語 末摘花巻』)「泣かせたまへど、はかばかしきこともなし」(『栄花物語 後くゐの大將』)など。「はかばかしきこと」は「なる」かならないかではなく、「ある」かないかなのである。○髪は丈ばかりなる——髪の長さは身長ほどである。「丈」は底本ほか諸本「き」だが、すでに指摘されているように、漢字「丈」↓仮名「き(支)」の誤写。また、「なる」も現存諸本すべて「ある」のようだが、前項とは逆に、「あ(阿)」は「な(奈)」の誤りとみるべきである。参考「髪はつややかにて、いとうつくしげにて、たけばかりなり」(『はいずみ』)「髪、色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにてたけばかりなりければ」(『枕草子』)「野分のまたの日こそ」の段)など。○頭の中將にさぶらふ小舎人童——頭の中將にお仕える小舎人童。「にさぶらふ」は、底本ほか諸本「の御」。このままでは「頭の中將の御小舎人童」となつて不可解であるため、「の(乃)御」は「に(爾)候」の誤りとみて改めた。後出の「君の御方に、若くてさぶらふ男」と同じ筆法。なお、あとで改めて触れるが、「若くてさぶらふ男」の部分も底本ほかで「わかくて御おとこ」とあるのは、たいへん興味深い現象である。○いみじうなりたる梅の枝——たいそう実の生つた梅の枝。季節的に造り物であろう。小舎人童が予め用意していた粋な小道具。実る恋を暗示すると同時に、梅の実「酸きもの」「好き者」の意も込めるか。○木綿かつら——神事に用いる木綿髪から、つる草の蔓を導く。○おしはなちていふ——「いふ」は底本ほか主要諸本で「いらふ」に作る。しかし、「いらふ」は下二段活用の動詞であるため、正しくは「いらふる」とあるべきである。よつてここでは、「い」と「ふ」の連綿箇所が誤つて「ら(良)」に読まれたものと判断して、清水浜臣自筆本等末流本文と同形の「いふ」を正當な本文と位置づける。

和歌はそもそも「いふ」ものであるし、前文の「いへば」ともうまく整合することになる。

【現代語訳】

賀茂祭の時節は、(京中の)ものみなすべてが華やかに見えるのであろうか、みすばらしい小さな家の半部までもが、(この時だけは) 双葉葵などを挿して気分爽快なようである。

(下仕えの) 女の子たちが、袈や袴をこざっぱりと着て、いろいろな物忌札なんかをつけ、おめかしをして、(銘々が)「私だって(ほかの子に) 負けてないわ」とライバルを意識した様子で往来をすれ違う姿は、(傍観者の目にも) おもしろく映るのに、ましてや、同じ階層の(異性である) 小舎人童や隨身などは、(そんな彼女たちを) とりわけ気に入めるのも当然である。

(男の子たちが) 思い思いに(目指す) 相手を決めては、冗談めかして口説くのも、「たいしてうまくいくこともあるまいよ」と、たくさん(の組み合わせが) 見える中で、どこ(のお屋敷の使用人) であろうか、(まず、) 薄紫色(の着物) を着ている、(そして、) 髪(の長さ) は身の丈ほどである、(なおかつ、) 髪形や体形などもともかわいらしい感じの女童を、頭の中將にお仕えする小舎人童が「理想のタイプだ」と思って、たいそう(多数の実が) なった梅の枝に、葵(の葉) をかけて、(その子に) 贈るということ、

この梅の枝のごとくあなたとへの思いが実を結ぶように、また、たわわになった梅の実が「酸きもの」すなわち「好き者」を暗示することく、あなたが色恋に手馴れた方であるようにと、心底願っているのです。みんなが頭に飾る葵のその名のとおり、あなたと逢う日を迎えて、葵の(葉のみならず) 根も見てみたい、否、あなたと(是

非) 寝てみたいものです。

と告白すると、(相手の女の子は)

(神聖な賀茂社の) 標縄の中の葵に這いかかる木綿鬘、いいえ木綿蔓は、いくら手繰っても手繰りきれないほど根が長いもののご承知おきください。(標の中の葵のように) 穢れを知らぬ私に(対し、「色好み」だなんてとんだ見当違いをなさって、蔓のようにしつこく) まとわりついてくるあなたは、いくらやって来ても(無駄骨で、私と) 共寝するのは(蔓の根がとつても長いように) 遙か先のことだとわかってくださいな。(お生憎さま。そう簡単にああなたの思いどおりには行きませんことよ。)

と拒絶するのも機転が利いている。(それを聞いた小舎人童は、)

「ああ、聞き辛い(ご返事だ) なあ(まったく)」

といって、(手に持っていた) 笈で走って(行つて女童を) ぶったので、

「(ほら) そこよ。(思いどおりの返事がもらえないからといって、私を「投げ木」ならぬ笈でぶつような) あなたの「嘆きの森」、すなわち) 仰山な落胆の態度が(私の) 気に障るんですよ。(性急で無神経な方ね。)」

などと(ことばを交わして)、身分の釣り合った者同士で、お互いに(相手のことを) 「もう惚れ惚れ」などと思つているように見える。(となれば、もはや時間の問題で、) その後、(小舎人童が) いつも通つて行つて共寝をしつつ(二人であれこれと) 語り合う(のであった)。

【余説】

賀茂祭（葵祭）は当時の人々が楽しみにして待った年間最大の行事であつた。その時節が訪れて「今めかし」さに包まれた京のありさまが、語り手の視点をとおして描き出される『ほどの懸想』の冒頭場面は、先学も指摘するように、『枕草子』の次の二つの記事を念頭に置いているものと思われる。

①四月、祭のころ（中略）、祭近くなりて、青朽葉、二藍の物ども押し巻きて、紙などけしきばかりおし包みて行きちがひ持てありくこそをかしけれ（中略）。童べの、頭ばかり洗ひつくろひて、なりはみなほころび絶え、乱れかかりたるもあるが、履子、沓などに、「緒すげさせ、裏をさせ」などもてさわぎて、いつしかその日にならなむといそぎおしありくもいとをかしや。あやしうをどりありく者ども、装束きしたつれば、いみじく定者などいふ法師のやうに、練りさまよふ、いかに心もとなからむ。ほどほどにつけて、親、をばの女、姉などの、供しつくろひ率てありくもをかし。

（「ころは」の段）

②つちありく童べなどの、ほどほどにつけて、いみじきわざしたりと思ひて、常に袂まぼり、人にくらべなど、えもいはずと思ひたるなどを、そばへたる小舎人童などに引きはられて泣くもをかし。

（「節は」の段）

なお、ここまでは、上中下三階層のうちもつとも身分が低い小舎人童と女童の、出会い（「いひよる」段階）から交際（「あふ」段階）に至るさまが、軽快かつ鮮やかに叙述されている。

二 — 語らい —

【本文】

いかになりにけむ、失せ給ひにし式部卿の宮の姫君の中になむ、さぶらひける。宮などく隠れ給ひにしかば、心細く思ひなげきつつ、下わたりに、人少なにて過ぐし給ふ。上は、宮の失せ給ひける折、さま変へ給ひにけり。姫君の御かたち、例のことといひながら、なべてならずねびまさり給へは、「いかにせまし。内裏などにおぼし定めたりしを、今はかひなく」などおぼしなげくべし。

この童、来つつ見るごとに、頼もしげなく、宮のうちも、さびしくすごげなるけしきを見て、語らふ。

「まろが君を、この宮にかよはし奉らばや。まだ定めたる方もなくておはしますに、いかによからむ。ほどはるかなれば、思ふままにも参らねば、『おろかなり』ともおぼすらむ。また、『いかに』とうしろめたき心地もそへて、さまたま安げなきを」

といへば、

「『さらに今は、さやうのこともおぼしのたまはせず』とこそ聞けば」といふ。

「御かたち、めでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、飽かぬところおはしますまむは、いと口惜しからむ」

といへば、

「あな、あさまし。いかでか。見奉らむ人々のたまふは、『よろづむつかしきも、御前にだに参れば慰みぬべし』とこそそのたまへ」

と語らひて、明けぬれば去ぬ。

【注解】

○失せ給ひける折―底本「うせ給けるにをり」をりに兼とあるのを、三手文庫本等により改めた。これは「に」を衍字とする考え方だが、別途「に」と「をり」の転倒を想定して、「失せ給ひける折に」を本来的な形とみることもできる。○例のこと―物語の設定としては定石、の意。末摘花のような例外はあるものの、零落した名家の姫君は絶世の美女である、というのが物語のお約束。○おろかなり―底本ほか諸本「をろかなる」。「なる」の下に「こと」等の省略を想定するなら、連体形もかろうじて容認できようが、ここはやはり、「り（利）」↓「る（留）」のありふれた誤写による転化本文とみて、終止形「なり」に改めるべきであろう。参考「げにおろかなりとも思いてむ」（『源氏物語』野分卷）「おはしまさぬ、おろかなりと、人思ふべきにあらず」（『夜の寢覚』巻二）「我ながら心憂く、おろかなりとおほえしや」（同巻四）など。○さやうのこと―姫君の結婚。人的・経済的基盤を喪失した今や、入内はおろか貴族の子弟との結婚も諦めざるをえないのである。○とこそ聞けば―以上が女童より上位の、女房階層から得た情報であることを表す。○とこそそのたまへ―これも、主人を「見奉らむ人々」、すなわち女房たちから聞いた間接的情報であることを表している。女童が姫君と直接接することはないのである。

【現代語訳】

（ところが、いったい何が）どうなったのだろうか、（女童は、いつからか出仕先が変わって、）亡くなってしまわれた式部卿の宮の姫君（に仕える人々）の中に（交じって）奉公していたのであった。（父）宮などは早くにお亡くなりになってしまったので、（姫君は）物心ともに不如意である現況に心を碎きながら、（上京にくらべるとさびれた）下京あたりに、お仕える人も少ない状態で過ごしておられる。北の方は（というと）、宮が逝去された折に、落飾し（尼になつて）しまわれた。姫君のご容貌は、（物語の設定として）いつものこととはいえ、並一とおりでなく（美しく）日に日にご成長なさるので、（尼上が）「どうしたものかしら。（宮は生前、姫を）入内させると心に決めていらしたのに、（故人となった）今はそのお気持ちも虚しく」などと、嘆き悲しんでおられるのも当然だろう。

この（小舎人）童は、やって来ては見るたびに、頼もしい様子がなく、お屋敷の中もひっそりとして荒涼たるありさまであるのを目にして、（女童に）話をもちかける。

「僕のご主人を、このお屋敷に通わせ申し上げたい。（幸い）まだ正妻もなくていらつしやるので、（実現すれば）どんなに良いことだろうか。（以前より）距離が遠くなつてしまったので、（ここに）思いどおりに参上するわけにもいかないのです、（君は）『僕の』愛情が足りない』とでも思つていらつしやることだろう。また（僕は僕で、『君が』）どうしているだろうか」と不安な気持ちも加わって、あれこれと心穏やかではないので」といふと、

「『（尼上は、こんなに落ちぶれ果てた）今（となつて）は、まったくそのようなことをお思いになつて口に出されることもありません』と聞いているので、（そんなお話はとてもとても）」

という。(すると、小舎人童は構わず、)

「(ところで、姫君の) ご器量は、文句なくていらっしゃるか。どれほど血筋のいい(家系の) お嬢様方だとしても、(当のご本人に) 満足できないところがあたりだとしたら、たいそうがっかりだろう」といので、

「まあ、呆れた。(よりによってご器量不足だなんて、) どうしてそんなことがありましようか。(姫君を) お世話申し上げるような(お立場の) 人々がおっしゃるには、『何かつけ気の塞ぐこと(があつて) も、御前にさえ参上すれば、(すつと) 楽になること請け合いです』ともつぱらおっしゃるわ」

と(睦言がてら) 話を交わして、夜が明けたので(小舎人童は) 辞去する。

【余説】

経緯は不明ながら、女童は奉公先を変えて、荒れ果てる一方の故式部卿の宮邸にお仕えすることになった。そこで、通い先が遠くなり恋人と頻繁に逢えなくなった小舎人童は、それぞれの主人同士、頭の中將と姫君を縁づけてしまえばよいと、一石二鳥の打開策を持ちかけるのであった。

姫君に直接仕える女房たちの証言「よろづむつかしきも、御前にだに参れば慰みぬべし」は、『竹取物語』冒頭部の、この児のかたちの顕証なること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。

をおのずと連想させる。故式部卿の宮の姫君が「かぐや姫」にも比肩する類まれな美女であることを暗示していよう。

三 — 若い男の恋 —

【本文】

かくいふほどに、年も返りにけり。君の御方に若くてさぶらふ男、好ましきにやあらむ、定めたる所もなく、この童にいふ。

「そのかよふらむ所はいづくぞ。さりぬべからむや」

といへば、

「八条の宮になむ。知りたる者さぶらふめれども、ことに若人あまたさぶらふまじ。ただ中将、侍従の君などいふなむ、『かたちもよげなり』と聞き侍る」

といふ。

「さらば、そのしるべして伝へさせよ」

とて、文取らすれば、

「はかなの御懸想かな」

といひて、持て行きて取らすれば、

「あやしのことや」

といひて持てのぼりて、

「しかじかの人」

とて見す。手もきよげなり。柳につけて、

したにのみ思ひ乱るる青柳のかたよる風はほめかさずや

「知らずはいかに」

とある。

「御返事^{かへりごと}なからむは、いと古めかしからむ。今様は、なかなかはじめのをぞし給ふなる」

などぞ、笑ひてもどかす。少し今めかしき人にや、

一筋に思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞ乱るらむ

今様の手の、才^{かど}あるに書き乱りければ、「をかし」と思ふにや、まもらへてゐたるを、君、見給ひて、うしろよりにはかに奪^ばひ取り給ひつる。

【注解】

○年も返りにけり―物語第二年目、恋の季節春を迎える。○君の御方に若くてさぶらふ男―底本ほか「君の御かたにわかくて御おとこ」に作るが、圈点を付した漢字「御」は漢字「候」の明白な誤り。よって、三手文庫本等により本文を改めた。この錯誤は、先に述べた誤写説Ⅱ「頭の中將の御小舎人童」↓「頭の中將に候小舎人童」を裏づける、願つてもない内部証拠となるはずである。○さりぬべからむや―（そのお屋敷には）器量よしの若い女房はいるか、の意。○さぶらふめれども―底本「さぶらめれとも^{本マ}」。三手文庫本等によつて改めた。「さぶらへども」とあり体に述べても

よいところを、婉曲の助動詞「めり」を用いることによってわざと曖昧に表現した。○さぶらふまじ―この「まじ」は、零落した式部卿の宮家に、そもそも器量がよく年も若い女房が多く仕えているはずがない、という世間的相場を前面に押し出す表現。○しるべ―女童を指す。○あやしのことや―奇妙な話だわ。「あやし」は、自分には理解不能な事態・行動・現象等に直面した当惑を表す形容詞。この場合は、若い男のあまりに唐突な求愛を、解せないことと受け止める女童の心理を表現している。○手も―手紙の料紙のみならず筆跡も、の意。手紙の主が洗練された魅力的な男性であることを暗示。○かたよる―(青柳の)糸を一定方向にばかり撚りかける意の「片撚る」に、特定方向(すなわちあなたの方)にばかり吹き寄せる意の「方寄る」を掛ける。○知らずはいかに―知るや君知らずはいかに―つからむわがかくばかり思ふ心を(『拾遺集』恋二・よみ人知らず)の第二句を引いたもの。○今様は―底本「いまやうくは」とあるのが、踊り字「く」を直後の「中く」が誘因となった衍字とみて削除し、三手文庫本等と同形の本文に改めた。○はじめのをぞ―底本「はじめのをう」。^{本マ}「う(字)」は「そ(曾)」の単純な誤写。三手文庫本等により改めた。「はじめの」は初回の恋文の意で、返事をしないのが通例。○し給ふなる―なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。(聞くところによれば)世間ではうよううだ、の意。○などぞ―底本「なとう」。^{本マ}先ほどと同じく「う」は「そ」の誤写。高松宮本等の祖本書写者には、どうやら「そ(曾)」の字を「う(字)」に写し間違える癖があったらしい。よってここも、三手文庫本等により改めた。○もどかす―年長の者が年少の者をからかう、などの意。この語は他の文献には見えないようだが、現在も宮崎県宮崎市などに方言として生き残っている。○今めかしき人―進取の気風に富む人。モダンな女性。○風に―底本「風よ」。^{に風}「よ(与)」は「に(爾)」の単純な誤写。三手文庫本等により改めた。○書き乱り―「書き乱る」は、意識して丁寧に書くのではなく、さっと書き散らすほどの意を表す四段動詞。参考「古

言など、もの思はしげに書き乱りたまへる、御手なども見どころあり」（『源氏物語』夕霧卷）「筆にまかせて書き乱りたまへるしも、見どころありをかしげなり」（同浮舟卷）など。○まもらへて―底本「まもとへて^{本マ}」。「と（止）」は「ら（良）」の単純な誤写。三手文庫本等により改めた。「まもらふ」は、凝視する意の動詞「まもる」に状態の継続を表す助動詞「ふ」が接合した語で、長時間目が釘づけになっている様子を表現。

【現代語訳】

こういつているうちに、新年を迎えてしまった。頭の中将のお住いに（まだ年）若くてお仕える男が、色好みな（質な）のだろうか、（ある時）この（小舎人）童にいうには、

「おまえが（今）通っている所はどこ（のお屋敷）だ。しかるべき（女房がいる）様子かい」というと、

「八条の（故式部卿の宮の）お屋敷です。（私が）知っている者がお仕えしているようですが、とりわけ若い女房が数多くお仕えるはずもありますまい。ただし、中将（の君）や侍従の君などという方々は、器量も良さそうだと聞いております」

という。

「それならば、その仲介役を通じて（俺の胸の内を）伝えさせろ」

といって、（すぐさま）恋文を渡すので、

「（いやはや、まったく）お手軽な恋ですね」

といつて、（女童のもとへ）持つて行つて託けたところ、（女童は、

「奇妙な話ね」

といつて（女房たちのいる所に、その手紙を）持参して、

「これこれこういう方（からの、突然のお手紙）です」

といつて見せる。（さて開けてみると、紙はもちろん）字もきれいである。（その手紙は、季節にふさわしい）柳の枝に（結び）つけてあつて、

下へ下へと乱れて延びる青柳の糸を片方にばかり攪り合わせるように、もつぱらそちらに向かつて吹き寄せる（春）風は、私が心中に秘めたやるせない恋の悩みをそれとなくお伝えしないでしようか。

「もしお気づきでなければ（どんなに辛いことでしょう）」

としたためである。（すると、古参の女房が、

「お返事がないのは、たいそう古風（に過ぎる）でしょう。今時（の流儀で）は、むしろ最初の（お手紙に対する）お返事を（皆さん）なさるそうです」

などと（いつて）、笑つてからかう。（当事者の若い女房も、）少し当世風の（氣質をもった）人なのだろうか、（さつそく、）

一筋に撚ら（れ）ない青柳の糸のように、一人の女性だけに思いを寄せることもない（多情な）あなた様は、その時々のお気持ちに任せて（あの人この人と）さぞかし思い乱れていらつしやることでしょうね。

（と、返歌を）流行りの書体で、（いかにも）才気ある風に走り書きにしたところ、（それを手にした若い男は、）「（こ

れは) おもしろい」 と思うのだろうか、じつと見つめて(座つて) いたのを、頭の中将様をご覧になって、背後からいきなり取り上げなさる。

【余説】

頭の中将に仕える若い男が、小舎人童から取得した情報をいち早く活用して、故式部卿の宮家の若い女房(中將の君または侍従の君)に「いひよる」段階から、首尾よく「いひつく」段階までが描かれる。小舎人童の恋とは違つて、いかにも手馴れた遊戯の様相を呈する恋と評せようか。

さて、ここで重要なのは、荒廃した邸内で不如意な日々を送っている宮の女房たちが、さぞ暗澹たる雰囲気で集っているものと思いきや、予期に反して、生き生きとした明るさに包まれている点なのである。冒頭部で用いられた本作の基調「今めかし」が、ここにおいて再度現れるのはとりわけ象徴的であるし、加えて「今様」という語も二度使われる。姫君を直に取り囲む人々は皆、進取の気風に富み、ハイカラで、どこまでも朗らかなのだ。

四 — 頭の中將の恋 —

【本文】

「誰がぞ」

と抓み捻り、問ひ給へり。

「しかじかの人のもとなむ。なほざりにや侍る」

と聞ゆ。「われも、いかでさるべからむたよりもがな」とおぼすあたりなれば、目とまりて見給ふ。

「同じくは、ぬむごろにいひおもむけよ。もののたよりにもせむ」

などのたまふ。

童を召して、ありさまくはしく問はせ給ふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひ聞ゆれば、「あはれ、故宮のおはせましかば。さるべき折はまうでつつ見しに」とよろづ思ひあはせられ給ひて、「世のつねに」などひとりごたれ給ふ。わが御うへも、はかなく思ひつづけられ給ふ。

いとど世もあぢきなくおぼえ給へど、また、「いかなる心の乱れにかあらむ」とのみ、つねにもよほし給ひつつ、歌などよみて問はせ給ふべし。「いかでいひつきて」などおぼしけるとかや。

【注解】

○**抓み捻り**―相手のからだをふざけて抓ることだが、主従関係を超えた二人の親密さ、頭の中將のいかにも若者らしい氣質が読み取れる。○**なほざりにや侍る**―氣持ちのこもっていない返事でしうか、の意。中將の氣を逸らそうとしたのである。○**もののたより**―恋文の仲介役。○**問はせ給ふ**―「問はせ」の「せ」は使役。頭の中將は、仲介者（若い男）を通じて小舎人童から詳細な情報を得るのである。○**まうでつつ見しに**―底本「まうて、つゝみしに」。主要諸本「まうて、」に作るが、踊り字「ゝ」は、下の「つゝ」に惑わされた明らかな衍字。なお、この前後の記述と頭の中將の年齢からして、式部卿の宮の逝去は、実際にはさほど昔のことではなかったと推察される。○**よろづ**―底

本以下諸本本文「もよろつ」だが、これでは意味不通であるため、「も(毛)」は「と(止)」のありふれた誤写とみて改めなければならない。「と」は直前の心中思惟を受ける引用の格助詞。○世のつねに―引歌未詳。○もよほし―もよほす」は、促す、急き立てるなどの意を表す四段他動詞。頭の中将が、若い男に手紙を届けるよう催促するのである。○問はせ給ふべし―問はせ」の「せ」は、前例と同じく使役の用法。若い男に、交際相手のいる故式部卿の宮邸を訪問させるのである。○いかでいひつきて―底本以下諸本「いかでいひつきし」。「し」をそのまま認めれば、過去の助動詞「き」の連体形と解さざるをえないけれども、文意がおかしなことになるし、文法的破綻も明らか。よって、「し(之)」は「て(天)」のよくある誤写とみて、本文を「いかでいひつきて」に改めた。頭の中将の高鳴る胸中を、「どうか(姫君からの)お返事をもらって…」といいさしの形で表現して、本作は鮮やかに完結する。

【現代語訳】

「(いったい)誰(から)の(手紙)だ」

と、(頭の中将は、若い男を) 抓って詰問なさる。(若い男はそれに答えて、)

「しかじかの人のもとに(手紙をやったのです)。(これは脈なしの) 気持ちのこもっていない返事でしうか」

と申し上げる。(頭の中将は、)「自分も、何とかして恋文を届けられるような橋渡しがあればなあ」と(かねてから)お思いのあたりだったので、(奪った手紙におのずと) 目が留まって(じっと) ご覧になる。(そして、男に、)

「どうせなら、(この女房を) 熱心に口説いて靡かせろ。(姫君に宛てた) 恋文の仲介役にでもしよう」
などとおっしゃる。

（そのあとで、小舎人） 童をお呼び出しになって、（お屋敷の） 現状を詳細に訪ねさせなさる。（小舎人童が、） 包み隠さず、心細げなありさまをお話し申し上げると、（それを聞いた頭の中将は、） 「ああ、故（式部卿の） 宮がご存命であつたならば（そんなことには…）。（私もかつて、機会あるごとに） うかがつては（立派なお屋敷のご様子を、この目で） 拝見したのに」と、さまざまな場面が自然と思ひ出されなさつて、「世のつねに」などと（いう歌の一句が） ひとりでお口から漏れる。（さらに、） ご自身の身の上まで、いつかは潰えるものよと思ひつづけられなさる。

（頭の中将は、日頃から無常を觀じておられるので） ますますこの世も無益なものにお感じになるけれど、（それはそれとして） また、「（いつたい） 何ゆえの惑乱であろうか」とばかり（に、故式部卿の宮の姫君への想いが募り）、 しょっちゅう（若い男を） 急き立てなさつては、（求愛の） 歌などを詠んで（故宮邸を） 訪ねさせていらつしやるのだらう、「どうにかお返事をいただいて…」 などと思ひになつていらした、とかいう話だ。

【余説】

小舎人童を利用して故式部卿の宮家の若い女房にまんまと「いひつ」いた若い男であつたが、そこへ主人頭の中將が登場し、今度は彼が若い男を利用してかねてより関心のあつた宮の姫君に「いひよる」算段をする。そして、「今めかし」さに貫かれたこの佳品は、頭の中將の期待に胸をときめかせる描写で締め括られる。小舎人童の「あふ」ステージに達した恋が若い男の「いひつく」ステージに至る恋を引き出し、さらにそれが頭の中將の「いひよる」緒に就いた恋を導くという、『ほどほどの懸想』の有する『ピラミッド状』の構成はまことに見事というほかない。

ところで、「あはれ、故宮のおはせましかは」から「わが御うへも、はかなく思ひつづけられ給ふ」までの、頭の中

『ほどの懸想』 注解

将が無常に浸る叙述をもつてして、彼を厭世觀に囚われた虚無的人物と決めつけるのはとてもない誤解である。物語に登場する上流貴族ならば、人の世のはかなさを思い知らされる報に接してこのような繊細な感受性が発露するのは、むしろ当たり前の話だからだ。主人公頭の中将は、あくまでも一個の恋する青年なのであり、姫君への恋の成就を一途に冀う一人の若者でしかないのである。